

# 図画工作科の指導に関する一考察

— 図画工作科に関するアンケート調査より —

菅野 雅人\*・福田 隆真

A Study of Teaching Art and Handicraft in Primary School  
— On the Questionnaire from Teachers in Primary School —

Masato SUGANO\* and Takamasa FUKUDA

(Received October 16, 1998)

キーワード：図画工作科，指導，教科内容，意識調査

## I はじめに

21世紀をあと4年後に控え、これからの社会の大きな変化に対応すべく、我が国の教育の在り方について検討が進められている。中央教育審議会の第一次答申は、ゆとりの中で「生きる力」を育むことを提言し、これを柱とした教育課程の基準の改定の基本的な考え方を次のように打ち出している。<sup>#1</sup>

- (1) 小学校段階の役割の基本については、個人として、また、国家・社会の一員として社会生活を営む上で必要とされる知識・技能・態度の基礎を身につけ、豊かな人間性を育成すると共に、自然や社会、人、文化など様々な対象とのかかわりを通じて自分の良さ・個人を発見する素地を養い、自立心を培うことを求めていくこと。
- (2) 子どもの現状、教育課程実施の現状と教育課題を踏まえること。
- (3) 教育においては、どんなに社会が変化しようとも「時代をこえて変わらない価値のあるもの」を子どもたちがしっかり身につける必要があること。
- (4) 教育においては、社会の変化を見通しつつ、これに柔軟に対応し得る人間の育成を期する必要があるということ。
- (5) 平成14年度(2002年)から実施される完全学校週五日制を円滑に実施するための教育の内容を検討すること。
- (6) 教育内容の厳選を徹底し、基礎・基本の確実な習得を図るようにしなければならないということ。
- (7) これからの学校教育における学習の指導と評価の在り方が極めて重要であること。

このような基本的な考え方に立ち、今回の教育課程の基準の改善のねらいとして「豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること」「自ら学び、

\*山口大学大学院教育学研究科美術教育専修(下関市立向井小学校)

自ら考える力を育成すること」「各学校がゆとりのある教育活動を展開する中で基礎・基本の確実な定着を図り、個性を生かす教育を充実すること」「各学校が創意工夫を生かし特色のある学校づくりを進めること。」の4点を掲げている。<sup>#2</sup>

以上のようなねらいの下に「道徳教育」「国際化」「情報化」「環境問題」「少子高齢化社会への対応」など、各学校段階・各教科等を通じた横断的・総合的な課題についても各学校で弾力的に対応していき、各学校の特色を生かした教育活動が展開できるようにしている。

こうした主旨を受け、図画工作科においては、「美術を愛好する心情と美に対する感性を育て、造形的な創造活動の基礎的な能力を伸ばし、豊かな情操を養うこと」「生活を明るく豊かにし、生涯にわたって描いたり、つくったりする創造活動を促すことを重視し、表現や鑑賞の喜びを味わうようにすること」「各学校の特質に応じてゆとりをもち、創意工夫を生かした教育活動が展開できること」「我が国やアジアなど諸外国の美術文化についての関心や理解を深めること」を中心的なねらいとして児童が楽しく造形活動にかかわり、個性を生かした多様で創造的な活動をしていくための基礎となる感覚・感性や想像力技能などの資質や能力などを育てていくことをねらいとしている。

図画工作科もこのような状況に対応すべく、教科の特質を生かして内容の厳選化を図りその存在の必要性を打ち出していかなければならない。そのためには、内容・指導法の見直しを図り、継続的な工夫・改善の努力が必要である。そのために学校現場の図画工作科に対する教員の意識調査を行うことが必要であると考えた。本論では、県内の小学校教員を対象としたアンケートの結果・考察をもとにしてこれからの図画工作科の指導の在り方について試論を述べていきたい。

## II 図工教育の現状と意識調査

### 1. 研究の目的

山口県内に勤務する小学校教員を対象に、現場教員の図画工作科に対する意識調査を行い、その現状を把握する。その調査結果をもとにして図画工作科における学習指導上の課題及び学校現場において図画工作科に求められている資質や能力等をとらえ、今後の図画工作科の内容・指導方法等の参考資料を得ることを目的とする。

### 2. 調査方法

#### (1) 調査対象者

山口県内の小学校の校長宛に調査用紙を郵送し調査依頼をした。また、公開講座に参加した小学校教員、県教育委員会主催で夏季に行われた認定講習に参加した小学校教員（一部中学校、特殊学校教員を含む）下関市の図工部主催で行われた夏季研修会に参加した教員にも調査依頼をした。

#### (2) 調査期日

1998年（平成10年）6月下旬～9月下旬

#### (3) 回答者数

地区別の有効回答者は次の通りである。

岩国市 14名 柳井市 14名 下松市 10名 防府市 8名

長門市 21名 萩市 30名 下関市 10名 美和町 3名  
 徳地町 2名 豊浦町 5名  
 公開講座参加者 14名 認定講習参加者149名 計 280名

(4) 調査内容

- ① 調査対象者の属性  
性別・教職経験年数・担当学年・大学時代の専攻内容
- ② 主要教科についての教師の考え方と意見
- ③ 教師の図画工作科に対する指導の姿勢
- ④ 教師が図画工作科の指導を進めるため必要だと思っていること、身につけていきたいこと
- ⑤ 方式による図画工作の指導法に関する教師の考え方と意見
- ⑥ 図画工作科と生活との関わりについて（自由記述）
- ⑦ 教師が図画工作科を通して子どもたちに身につけさせたいと思っていること
- ⑧ 現行指導要領に沿った図画工作科の内容・教科書に関する教師の考え方や意見
- ⑨ 図画工作科の必要性の有無に関する教師の考え方と意見について
- ⑩ 図画工作科に関する教師の考え方と意見について（自由記述）

(5) 調査結果

- ① 調査対象者の属性  
男女比については、男性教員が124名（44%）女性教員は156名（56%）であった。回答者の内訳については、次の通りである。

表1 回答者数(教職経験年数)

経験年数	回答者数(割合)
1～3年	19人( 7%)
4～10年	66人( 23%)
11～20年	164人( 59%)
21～30年	28人( 10%)
31年～	3人( 1%)
合計	280人(100%)

表2 回答者数(担当学年)

担当学年	回答者数(割合)
低学年	61人( 22%)
中学年	72人( 26%)
高学年	100人( 36%)
その他	45人( 16%)
合計	278人(100%)

表3 回答者数(専攻内容)

専攻内容	回答者数(割合)
教育学部 美術専攻	20人( 8%)
教育学部 美術以外	195人( 80%)
教育学部 以外出身	26人( 11%)
合計	243人(100%)

注) 合計人数がそろってないのは(表2・3で)未回答者があったためである。

教職経験年数は、11～20年が60%近くを占めており、次いで4～10年の23%が続いている。経験年数3年以下の教員は7%、21年以上の教員は11%であり、年齢別では30～40代の中堅教員が全体の80%を占めた。しかし、全体的には幅広い回答を得ることができたのではないと言える。

担当学年についても、低学年が22%、中学年が26%、高学年が36%、その他(専科・特殊学級・中学校)が16%であり、全体として幅広い回答を得ることができた。

大学時代の専攻内容については、教育学部で美術を専攻していた人が8%、教育学部で美術以外を専攻していた人が80%、教育学部以外の人(出身)の人が11%で、教育学部の出身者が多数

を占めている。

## ② 主要教科についての教員の考え方と意見について

学校現場では、国語・社会・算数・理科（生活）を主要教科、図画工作・音楽・体育を技能（芸能）教科と区別して考えられていることが多い。著者は各教科に対する区別はしていないが、日常的に使用されている主要教科の概念を用いて調査を行った。その結果として後者は、主要教科の片隅に追いやられがちになる。それでは、学校現場で主要教科とは具体的にどのような教科だと考えられているのであろうか。

「図画工作・音楽・体育が技能教科と言うのに対し、国語・社会・算数・理科は『主要教科』と言うことがあります。主要教科とはどんな教科だと思いますか」という問いに対し「将来の生活のために必要最低限のことを身につける教科」と答えた人が68%「受験のために必要な教科」答えた人が24%、その他が8%だった。内容別に見てみると、表4・表5の通りである。

表4 主要教科について（教職経験年数別）

	1～3年	4～10年	11～20年	21～30年	31年～	合計
将来の生活のために必要最低限のことを身につける教科	63%	62%	52%	63%	100%	68%
受験のために必要な教科	32%	24%	38%	26%	0%	24%
その他	5%	14%	10%	11%	0%	8%

表5 主要教科について（担当学年・専攻内容別）

	低学年	中学年	高学年	その他	合計	教育学部 美術	教育学部 美術以外	教育学部 以外	合計
将来の生活のために必要最低限のことを身につける教科	57%	56%	56%	55%	56%	40%	64%	35%	46%
受験のために必要な教科	28%	33%	33%	32%	32%	45%	27%	46%	40%
その他	15%	11%	11%	12%	12%	15%	9%	19%	14%

担当学年別では、3つの項目の割合がどの学年も同じような傾向だった。専攻内容別では、教育学部美術以外が「将来の生活のために最低限のことを身につける教科」、教育学部美術と教育学部以外では「受験に必要な教科」を選んでいる割合が高かった。

また、「その他」の意見については、次の通りである。

- ・生涯にわたり学んでいくための基礎・基本を身につける教科である。
  - ・自分が学びたいと思う教科（個性を尊重）
  - ・物事を考える基準や基礎を養う教科。時間数が多い教科。積み重ねが必要な教科。
  - ・本来の主要教科というのは、もっと別の意味でとらえなければいけないと思う。
- 図工等、趣味、ゆとりの素地となるものも人生の上でとても大切なものだと思う。

- ・自分自身、主要という言葉を使っていないし、上の四教科だけが将来の生活のために必要であるとは思っていない。

### ③ 教師の図画工作科に対する指導の姿勢

小学校は、原則として全教科を担当している。しかし、それぞれが大学時代に専門的に勉強していたことがあり、必ずしもすべて領域について、十分な指導ができるとは思ってはいないだろう。実際の指導場面では、子どもたち一人一人の良さが生かせるような指導ができるようになりたいという思いを持ちながら子どもたちに接していると思われる。それでは、図画工作科を指導することに対して教師はどんな思いを持っているのだろうか。

「あなた自身、図画工作科を指導することは好きですか。(図画工作科の時間がくるのを楽しみにしていますか)」という問いに対して、「好きである」が60%、「どちらとも言えない」が38%、「好きではない」が2%であった。全体の60%が、図画工作科の指導をすることは好きであると答えている。

また、内容別に見てみると、表6、表7の通りである。

表6 教師の図画工作科に対する指導の姿勢（教職経験年数別）

	1～3年	4～10年	11～20年	21～30年	31年～	合計
好きである	68%	60%	58%	79%	33%	60%
どちらとも言えない	32%	34%	39%	21%	67%	38%
好きでない	0%	5%	3%	0%	0%	2%

表7 教師の図画工作科に対する指導の姿勢（担当学年・専攻内容別）

	低学年	中学年	高学年	その他	合計	教育学部 美術	教育学部 美術以外	教育学部 以外	合計
好きである	62%	60%	61%	60%	61%	55%	59%	58%	57%
どちらとも言えない	33%	39%	33%	31%	34%	40%	37%	42%	40%
好きでない	5%	1%	6%	9%	5%	5%	4%	0%	3%

教職経験年数別でみると、経験年数が1年から3年までは約70%が「図画工作の指導は好きである」と答えている。「図画工作科の指導は好きではない」という割合は、経験年数1年から3年まで0%であるが、教職経験4年から10年になると5%と増えている。しかし、経験年数が経つにつれてまたその割合は減ってきている。

担当学年別では、高学年で「図画工作の指導は好きでない」という割合が6%と多い。低学年でも5%、その他で9%が「図画工作の指導は好きではない」と答えている。中学年では「図画工作の指導は好きではない」と答えた割合は減っていると同時に「好きである」という割合もやや減っている。

専攻内容別では、教育学部美術以外が「図画工作の指導が好きである」と答えた割合が一番多かった。教育学部美術は、「図画工作科の指導は好きである」と答えた割合が一番少なかった。「好きでない」も5%と一番多かった。教育学部以外は、全体の傾向に似ていた。また「図画工作科の指導は好きではない」という答えた者も0%だった。

④ 図画工作を指導する上で必要だと考えていること、身につけたいと思うこと

教師は、図画工作科の指導を進めるにあたってどんな内容が必要であると考えているのであろうか。また、どんな内容を身につけていけば、子どもたち一人一人の思いを生かした指導ができると思っているのだろうか。内容別に見ると、表8、表9の通りである。

表8 図画工作の指導に必要なこと（教職経験年数別）

	1～3年	4～10年	11～20年	21～30年	31年～	合計
技術・技能	74%	64%	66%	79%	33%	63%
発想力・創造性	47%	45%	41%	61%	100%	59%
感性・感受性	47%	58%	51%	61%	0%	43%
美的センス	21%	27%	20%	54%	0%	24%
その他	5%	7%	5%	4%	0%	4%

表9 図画工作の指導に必要なこと（担当学年・専攻内容別）

	低学年	中学年	高学年	その他	合計	教育学部	教育学部	教育学部	合計
						美術	美術以外	以外	
技術・技能	69%	67%	64%	76%	69%	45%	69%	15%	43%
発想力・創造性	44%	54%	37%	78%	53%	35%	50%	42%	42%
感性・感受性	56%	70%	45%	47%	55%	60%	52%	50%	54%
美的センス	25%	32%	16%	33%	27%	30%	25%	23%	26%
その他	2%	5%	7%	11%	6%	5%	5%	19%	10%

「図画工作科の指導を自信を持って行うことができるようになるためには、どのようなことを身につけておかなければいけないと思いますか。また、どんなことを身につけたいと思いますか」という問いに対しては、技術・技能63%、発想力・創造性59%、感性・感受性43%の順で割合が高かった。担当学年別では中学年で感性・感受性、その他で技術・技能と発想力・創造性の割合が高かった。また、専攻内容別では、教育学部美術が感性・感受性、教育学部美術以外では技術・技能、教育学部以外ではその他の項目が必要だと回答している割合が高い。また、ここでは全体の傾向として「技術・技能」「発想力・創造性」「感性・感受性」の3つの項目の割合の差が少なくなっている。

⑤ 方式による図画工作の指導について

平成年代の美術科教育の論点の一つとして指導方法のマニュアル化がある。その代表的なものが「酒井方式」「キミ子方式」といった方式による図画工作科の指導法である。展覧会にもこの方式で指導した作品が出品されている。現場の教師は、方式による図画工作の指導法についてどのような考えや意見を持っているのであろうか。

「方式による図画工作の指導のしかたがあることを知っていますか」という問いに対して回答を求めた。その結果「知っている」が66%、「知らない」が34%であった。

内容別に見ると、表10・表11の通りである。

表10 方式による図画工作の指導について（教職経験年数別）

	1～3年	4～10年	11～20年	21～30年	31年～	合計
知っている	79%	81%	74%	75%	67%	75%
知らない	21%	19%	26%	25%	33%	25%

表11 方式による図画工作科の指導について（担当学年・専攻内容別）

	低学年	中学年	高学年	その他	合計	教育学部	教育学部	教育学部	合計
						美術	美術以外	以外	
知っている	74%	81%	76%	74%	76%	94%	77%	69%	80%
知らない	26%	19%	24%	26%	24%	6%	23%	31%	20%

教職経験年数別では、1年から10年までが「知っている」という割合が高く、年数を経るに従ってその割合が減っている。担当学年別では、中学年で「知っている」という割合が一番高く、低学年、その他が低くなっている。専攻内容別では、教育学部美術専攻で「知っている」という割合が最も高く、教育学部以外で低くなっている。

【方式による図画工作科の指導の実施の有無とその理由について】

方式による図画工作科の指導を実施したことがあるかないかとその理由を聞いた。実施したことがある場合には、実施後の子どもたちの反応と教師の考え、実施したことがないという場合は、その理由を聞いてみた。

全体では「実施したことがある」が46%「実施したことがない」が54%で実施の有無の割合はだいたい半々であった。内容別に見ると、表12・表13の通りである。

表12 方式による図画工作科の指導の有無について（教職経験年数別）

	1～3年	4～10年	11～20年	21～30年	31年～	合計
実施したことがある	20%	63%	52%	48%	50%	46%
実施したことはない	80%	37%	48%	52%	50%	54%

表13 方式による図画工作科の指導の有無について（担当学年・専攻内容別）

	低学年	中学年	高学年	その他	合計	教育学部	教育学部	教育学部	合計
						美術	美術以外	以外	
実施したことがある	36%	45%	73%	42%	49%	29%	53%	61%	48%
実施したことはない	64%	55%	27%	58%	51%	71%	47%	39%	52%

教職経験年数で見ると、4～10年が「実施したことがある」という割合が一番高く、1～3年が最も低かった。担当学年別では、学年が上がるにつれ「実施したことがある」という割合が高くなり、高学年では70%以上が実施している。専攻内容別では、教育学部美術以外で「実施したことがある」という割合が高い。全体的には実施したことがあるとそうでない場合の割合は半々だった。

次に、方式による図画工作科の指導について子どもたちの反応と指導の有無の理由を聞

いてみた。「この方式による指導に賛成である」「ある程度の意義は認めるが全面的に賛成ではない」「反対である」という3つに分けられた。主な意見は次の通りである。

「この方式の指導に賛成である」という意見

- ・絵をどのような方法で描いてよいか分からない子ども段階を追って描くことができ、絵に興味を持ち始めた。
- ・図工が苦手と思っていた児童に自信をつけさせる一つの手だてとなった。
- ・写実の技術が高まったように思う。
- ・子どもが生き生きと活動して、よい作品がたくさんできた。
- ・子どもたちの絵が明らかに変わり、動きが出てきた。

「ある程度の意義は認めるが全面的に賛成でない」という意見

- ・作品のできあがりはいいが、その場限りのものでしかない。「(その場限りのものでしかない)」の他に、自力で描く力につながらない、子どもの自由な発想は奪われる。その子の主題ははっきり出てきにくいという意見があった)
- ・技術を身につけるにはよいが、主体性、創造性をつけるには好ましくない。

「この方式の指導には反対である」という意見

- ・きらい、その子の描きたい方法でかかせたい、型にはめたくない。
- ・やらせる授業でなく、子どもの主体的な取り組みによる授業を希望する。
- ・技術のみを教えるのはいやだから、そういうやり方は、子どもが自分が描いているうちに見ついたり、見つけなかったりするもので、自分なりの絵が描けなくなる。

#### ⑥ 図画工作科内容と生活との関わりについて

小学校では生活のいろいろな場面と関わりを持たせながら指導を進めていくことが大切である。図画工作科では、特にこの事に留意しなければならないと言われている。それでは、図画工作科の内容は、生活場面にどのように関わっているのだろうか。自由記述の形で答えてもらった。

大きく分けて「子どもの遊びや伝達、表現の手段」「生活に役立てたり、楽しくするための工夫」「情操力や感性を豊かにする」「その他」の4つに関する意見があった。それらの中の意見の主なものとして次のようなものがあった。

「子どもの遊びや伝達、表現の手段」

- ・自己表現をしたいと考えた場合、その表現方法の一選択手段
- ・生活したこと(体験)を平面、立体で自己表現する。
- ・生活の中で経験したことが題材になったりする、生活での感動が作品に取り組むエネルギーになること。

「生活に役立てたり、楽しくするための工夫」

- ・生活の中で使うものを工夫したり、自分の部屋を感じよくしたりすること。
- ・学習環境や家庭環境を豊かにするためにこれからの自分の生き方を楽しくするため。



- ・作品をつくる過程で習得できる技術は生活の中で生かされる。  
「情操力や感性を豊かにする」
- ・感動体験、美しいものを美しいと感じる目を育てる。
- ・ものをつくる喜び、成就感を味わうことができる。
- ・生活の中で体験したことについての感動、培われた感性を表現・表面化するための具体的な方法としての一つである。

「その他」

- ・生涯教育の一つとして必要。豊かな人生を生きる一つの方法として必要。
- ・生活の中で使用できる様々な材料を有機的に結びつけて再利用していくことは、環境教育において重要である。
- ・異文化理解。発想の柔軟性。

⑦ 教師が図画工作科を通して子どもたちに身につけていかせたいと思っていること

図画工作の活動を通して、教師は子どもたちにどんなことを身につけていかせたいと思っているのだろうか。「図画工作科を通して子どもたちにどんなことを身につけていかせたいと思いますか。次の中から（創造性・発想力・思考力・主体性・情操・知識理解・技術技能）3つあげて下さい」として回答を求めた。上位3つは「創造性」83%、「発想力」64%、「技術・技能」50%であった。それに対して思考力や知識理解の割合は少なかった。回答者別に見ると表14・表15の通りである。

表14 図画工作科を通して子どもたちに身につけていかせたいこと（教職経験年数）

	1～3年	4～10年	11～20年	21～30年	31年～	合計
創造性	74%	80%	77%	79%	100%	83%
発想力	74%	77%	66%	71%	33%	64%
思考力	26%	11%	11%	11%	33%	18%
主体性	32%	24%	36%	25%	33%	3%
情操	37%	33%	37%	46%	0%	31%
知識・理解	0%	0%	0.6%	3%	0%	0.7%
技術・技能	42%	41%	43%	57%	67%	50%

表15 図画工作科を通して子どもたちに身につけていかせたいこと（担当学年・専攻内容別）

	低学年	中学年	高学年	その他	合計	教育学部 美術	教育学部 美術以外	教育学部 以外	合計
創造性	82%	81%	78%	64%	76%	60%	74%	100%	78%
発想力	80%	76%	69%	64%	72%	70%	73%	81%	75%
思考力	8%	13%	8%	18%	12%	20%	9%	19%	16%
主体性	36%	28%	28%	38%	33%	30%	35%	65%	43%
情操	43%	36%	37%	31%	37%	30%	35%	65%	43%
知識・理解	0%	0%	1%	2%	0.8%	0%	0%	3%	1%
技術・技能	48%	46%	44%	36%	44%	30%	49%	42%	40%

担当学年、専攻内容別でも「創造性」と「発想力」が図画工作科で子どもたちに身につけていかせたい内容として上位を占めた。特に低学年では2つとも80%を超えていた。逆に「知識・理解」の割合がどこでも低かった。特に、担当学年別では低学年と中学年、専攻内容別では美術専攻と教育学部美術以外は0%だった。

⑧ 現行指導要領に沿った図画工作科の内容・教科書に関する教師の考え方と意見

現在の指導要領の考えの下での図画工作の指導について自由記述で回答してもらった。技術・技能面を中心とした指導が必要であると考えている教師が多かった。指導が必要であるという理由として、基礎・基本なことを指導しておかないと子どもたちの表現欲求を満足させることはできない。道具の使い方や色の塗り方など技術的なものを指導してこそ楽しく図工に取り組める、基礎・基本的な内容を指導しなければ主体性、創造性は育たないということがほとんどあった。ただし、あくまでも教師が一方的に教え込むのではなく、子どもの主体性を大切にしたり、学年の発達段階に沿った指導が大切であるとしている。また、指導する場面と子どもに任せる場面とをどう見極めていけばよいかか難しいという意見もあった。教科書については、全体的に「使いやすい」という意見が多かったが、パレットの使い方や三原色、暖色、寒色など技術指導の面でもう少し具体的にして分かりやすくして欲しいという意見もあった。

⑨ 図画工作科の必要性の有無についての教師の考えと意見

現場の教師は、図画工作科はこれからも必要な教科であると考えているのだろうか、それとも必要でないと考えているのだろうか。必要であるとすればどんな理由からなのだろうか。「図画工作科はこれからも必要な教科だと思いますか、それとも必要でないと思いますか」という質問について回答を求めた。また、どのような理由で図画工作科が必要なのかその理由についても尋ねてみた。結果については、表16・表17の通りである。

表16 図画工作科の必要性の有無について（教職経験年数別）

	1～3年	4～10年	11～20年	21～30年	31年～	合計
必要である	84%	92%	90%	100%	67%	86.6%
どちらとも言えない	16%	8%	8%	0%	33%	13%
必要でない	0%	0%	2%	0%	0%	0.4%

表17 図画工作科の必要性の有無について（担当学年・専攻内容別）

	低学年	中学年	高学年	その他	合計	教育学部	教育学部	教育学部	合計
						美術	美術以外	以外	
必要である	90%	92%	90%	93%	91%	100%	91%	92%	94%
どちらとも言えない	8%	8%	7%	7%	8%	0%	8%	9%	5%
必要でない	2%	0%	3%	0%	1%	0%	1%	0%	0.3%

図画工作科の必要性の有無については90%近くがこれからも図画工作科は必要な教科であると答えている。担当学年、専攻内容別では、低学年で2%、高学年で3%、教育学部

美術以外で2%「必要でない」という意見があったが全体としては、90%近くが図画工作科はこれからも必要な教科であると答えている。それでは、どんな理由で図画工作科は必要な教科だと考えているのだろうか。その結果については表18・表19の通りである。

表18 図画工作科の必要性の有無の理由について（教職経験年数別）

	1～3年	4～10年	11～20年	21～30年	31年～	合計
主体性を育てるのに必要である	21%	17%	17%	29%	33%	23%
創造性を育てるのに必要である	74%	62%	67%	54%	67%	65%
子どもたちの心に関わるので学級経営の柱になる	26%	11%	13%	36%	33%	24%
技術を身につけることで将来の生活に役に立つ	16%	4%	7%	7%	0%	7%
その他	11%	12%	10%	14%	0%	9%

表19 図画工作科の必要性の有無の理由（担当学年・専攻内容別）

	担当学年					合計	専攻内容別			合計
	低学年	中学年	高学年	その他	教育学部美術		教育学部美術以外	教育学部以外		
主体性を育てるのに必要である	23%	24%	11%	22%	20%	20%	17%	35%	24%	
創造性を育てるのに必要である	64%	69%	62%	60%	64%	55%	69%	42%	55%	
子どもたちの心に関わるので学級経営の柱になる	21%	22%	7%	20%	18%	15%	17%	8%	13%	
技術を身につけることで将来の生活に役に立つ	8%	7%	9%	2%	7%	10%	7%	8%	8%	
その他	10%	14%	14%	4%	13%	5%	12%	23%	13%	

創造性を育てるのに図画工作科は必要であるという回答が60%以上の割合を占めた。教職経験年数、担当学年、専攻内容別に見ても同じような傾向が見られた。その他の意見としては次のようなものがあった。

- ・図画工作科は子どもたちの好きな教科の一つである。子どもが楽しみにしている教科。
- ・人間の生活の中に「美の教育」は大切である。・文化の継承、発展に必要である。
- ・生活がより豊かになる。将来趣味として取りつきやすくなる。生涯にわたって楽しむことができる。(生涯教育)

#### ⑩ 図画工作科についての教師の考え方と意見

図画工作科について思っていることを自由記述で書いてもらった。主なものとして次のような意見があった。

- ・コンクールについて、年間指導がコンクールに振り回されてゆとりを持って指導にあた

ることができない。

- ・評価について、評価が主観的になってしまう。図画工作は評価が必要なのであるか。
- ・楽しさばかりを重視して、あまり内容のない、成長したと実感のないことが多い。多少の苦を強いて導く必要もあるのではないか。
- ・最近、環境問題が重視されなかなか再製品利用ということが難しくなっている。つくったものも捨てる時は分別をしないといけない。これからの図画工作科はこのことを抜きに考えられなくなる。
- ・専門的な知識・技能が必要な教科であるので研修の場がたくさん欲しい。
- ・自分自身が図画工作科を好きになったことで主要教科と呼ばれているものと区別して捉えることがなくなってきた。

### Ⅲ まとめと考察

本調査によって得られた現場の教師の図画工作科に関する意識調査の中から、学校教育活動全体の中での図画工作科の位置づけ及び必要性の有無とその理由、図画工作科を指導するにあたって教師が身につけておかなければならない資質や能力、図画工作科を通し子どもたちに身につけていきたいと思っている力などを中心にして、これからの図画工作科の方向性について考察を試みたい。

アンケートの結果を見ても、図画工作科がこれからも学校教育において必要な教科であると考えている教師は80%以上いる。そして、その中の約60%が図画工作科を通して創造性を育むことができるという理由によるものである。このことは、戦後から美術教育の教育内容で創造性に関する教育の目標が時代背景の変化にかかわらず、常に活動の中心をなしてきたことが大きく関わっていると考えられる。しかし、学校現場では「創造性を育む」という言葉だけが一人歩きをして、創造性を育成する実際の指導法や基礎学力との関係などについてあまり検討されてこなかったと言える。それに加えて現行指導要領の下の「一人一人の子どもたちの思いを大切にすること」が子どもたちの思いのままにすると受け取られ、教師が子どもたちに対する指導をためらってしまうこととなり、ますます混乱を招くこととなってしまった感がある。子どもたちの思いを生かしていくには、子どもたちの自由に任せるだけでなく、発達段階や一人一人の特性に応じた指導が必要であることを90%以上の教師が感じている。その中でも「技術・技能」が必要だと考えている割合が約70%を占めている。

方式による指導が学校現場に広がってきている理由の一つが、子どもたちが満足する表現をさせるために必要な技術・技能を段階的に効率よく指導することができるからであると思われる。特に学年が上がるにつれて実施の割合が高くなっている。しかし、このやり方で図画工作科の指導することに賛成の立場をとっている場合でも、このやり方ですべてを網羅できるとは考えてはおらず、あくまでも方法の一つとしてとらえこれをきっかけとして一人一人が主体的に表現活動に取り組んでいけるようにしていきたいと考えていることが伺える。技術・技能の他に「発想力・創造性」「感性・感受性」の2つの要素が図画工作科の指導に必要な要素であると答えているが、教職経験年数が上がるにつれて3つの割合の差が少なくなっている。これらをバランスよく身につけていくことが図画工作科の学習では大切だと考えているからであろう。

この他、「思考力」「知識・理解」を必要な要素であると考えている割合が大変低かった。(思考力は13%、知識理解1%) 現行指導要領においてもこれらの能力は「関心・意欲・態度」「技能・表現(又は技能)」と共に、子どもたち一人一人が、自分の思いなど、さまざまなよさを生かした主体的な学習活動を通して、自ら高めたり、新たに獲得したりして、豊かな自己実現の資質や能力の体系に組み込まれ、思いのままに生きて働くものとなったものであって、新しい教育において育成をめざす基礎・基本の柱となるものであると述べられていることから<sup>3)</sup>、 これらも図画工作科において育んでいくべき資質や能力であるはずなのだが、教師にこれらが必要だという意識はあまり高いとは言えない。これは、これまでの学校教育において、図画工作科が知的教科と二分される情意的教科として扱われてきたことが影響していると考えられる。このことに関して茂木一司は、教育活動において「知育」と「情操」は対立するべきものでなく「徳育」「美育」と共にすべてに一貫して配慮されなければならないはずである。いいかえると教育とは常に「情操」まで配慮されて正常といえるのである。人間感情を表出する知覚形成の創造活動」と定義される芸術、その一部である美術の教育が感情教育を課題とすることは重要であるが、決して感情のみの発達に向けられるのではなく、人間を人間たらしめる知性を軽やかに機能させる援助が、主たる目的とならねばならないという見解を示している。<sup>4)</sup> このようなことから、図画工作科でも指導課程の中で知識・理解や思考力を身につける場面をつくる必要があるだろう。そして、それらは学校の中でしか通用しない「特殊」なものでなく、子どもたちの表現活動や生活場面、社会生活の流れなどに何らかの形で関わりを持ち、真に生きた力となるようにしなければならない。

本調査の中で「主要教科とはどのような教科だと考えますか」の質問に対して、主要教科をこれまでのように国語、算数、社会、理科だけと考えないでもっと別の意味でとらえていかなければならないとか、主要教科、技能教科という分け方をすること自体疑問に思うし、自分自身、主要という言葉を使っていないし、四教科だけが将来の生活のために必要とは思っていないという意見があった。このことは、現場の教師が学校教育活動全体という枠組みの中で、子どもたちが成長するために必要な素養を各領域から見出し、互いに関連を持たせた指導がこれから必要であると感じてきていると考えられる。

最後に教材開発についてであるが、稲垣佳世子は、学校で学んだ技能や概念が、生産性(直接有用な結果)を第一義に求めることから離れ、間接的な有用性しか持たない。そのことは物事を深く理解する上で大きな利点ではあるが、子どもの学習への意欲を低下させやすいという問題点がある。そこで授業の中で子どもの学習を、もっと日常生活と結びつける工夫が必要であると指摘している。<sup>5)</sup> 本調査で図画工作科と生活の関わりについて聞いたところ、①遊びや自己表現、伝達的手段としての関わり。②感性を豊かにし情操を育てることで生活に潤いを持たせる。③他者との協力、まわりの存在を意識するといった社会性の育成という3つの意見に分けられた。①と②については、これまで意識されてきたことであるが、③については「国際化」「情報化」「環境教育」といった教科横断的な教育の流れに対処していくためにも必要な事項であると言える。

本調査により学校現場の教師が図画工作科をこれからも必要不可欠な存在であると考えていることが分かった。今後は、これからの教育に向けて図画工作科の必要性を具体的にどのように訴えていくかが課題となるであろう。最後に本調査の協力に当たって快くご協力いただいた関係各先生方に心よりお礼を申し上げ本稿のまとめとしたい。

## 注

- 1) 「教育課程審議会・審議のまとめ」1998
- 2) 前掲書
- 3) 文部省「新しい学力観に立つ図画工作科の学習指導の創造」日本文教出版 1993 P.13
- 4) 宮脇 理監修「新版 美術科教育の基礎知識」建帛社 1994 P.3
- 5) 波多野誼世夫・稲垣佳世子「知力と学力」岩波新書 1984 PP.176-177

## 付記

本稿作成にあたり、アンケート調査を含め全体の構想を菅野、福田が担当し菅野が執筆し、両者がまとめた。